



Vol.16



「折笠うるし工房」

- 住所：福島県郡山市安積町笹川字北向6-3
- 電話・ファクス：024-945-1628
- 営業時間：午前10時～午後6時
(来訪の場合には要事前連絡)



▲気品あふれる漆芸品。この光沢が多くのファンを魅了している

物心ついたころから、兆春さんにとつて父・光民さんはすでに蒔絵師（まきえし）金粉や貝の粉などを使って漆工芸品を美しく装飾する「工芸師」でした。「チリやホコリが舞うから」という理由で、子どもたちは仕事場に入ることは禁止でした。我が子といえども、直接、漆や蒔絵を教えることができることは一切なし。唯一仕事場に入れる時間は、食事の前に「父ちゃん、ご飯だよ」と呼びに行くこと

すけれど、昔は部屋全体を炭火で温めたんです。よね。よくやっと思います。」

光民さんは3人の弟子を抱えていました。弟子たちも、黙々と蒔絵を仕上げていました。現在は最低賃金制度があるため、工房で働けば給料が出ますが、当時は給料制ではありません。弟子たちは全員が親からの仕送りで生活していました。自分で弁当を持ってきて工房で作業をし、師匠の技を目で見て、そして実際にやってみて、習得していきました。「師匠は、盆と正月だけ、弟子たちに小遣いをあげ、下駄を買ってやるのが通例」だったそうです。実際に光民さんも弟子入り時代は同じ道を経験してきました。光民さんの弟子たちも、辛抱強く師匠の手伝いをしながら技を習得し、やがて独立していき

き。兆春さんは、仕事場にそーと入っていつて、仕事をしているところや、作品を見て、自分なりに「蒔絵の仕事はこういうものだ」と理解しました。

光民さんの姿で覚えているのは、蔵の二階で、夜中の2時、3時ごろまで黙々と仕事をしている横顔。「親父は夜、仕事場で寝ていました。それは漆を乾かすために、夜通し炭火を炊かないといけないから。今は電気で行くだけでもできま



▲中学生に買工芸を教える折笠さん



▲使えば使うほど光る漆芸品。なめらかな手触りに美しい朱色の光沢。使い込めば使い込むほど味わいがでてきます。折笠うるし工房で出されたお茶の茶托も40年以上使い込まれたものだそう。



▼古い工具
漆工芸のための古い工具が折笠うるし工房には保存されています。何人もが使った汗がにじんだ工具です。



▲金箔を漆に貼る時には、竹のピンセットで優しくつまみます。数ミクロンの薄い金箔なので、慎重に、慎重に。丁寧に繊細で注力力の要る作業が求められます。

漆のトリビア

朱色にツヤツヤと光り、漆（うるし）と金箔（きんぱく）や金粉、プラチナ粉や青貝など、気品あふれる風合いが特徴の花器や茶托、手鏡が工房にズラリと並んでいます。これらの作品は、会津塗りの手法を元に、オリジナルテイの高い独自の乾漆技法「兆春塗」を用いた漆工芸品を発表し続ける漆工芸家の折笠兆春（光助）さん（78）は会津若松市出身、郡山市在住、折笠うるし工房代表Ⅱの手によるものです。1981年から日展に25回も入選したのをはじめ、各賞を受賞するなど高い評価を得ています。

漆は縄文時代、縄文のほかに、粟（あわ）や稗（ひえ）と練り合わせて、織（やじり）等を作る際の接着剤として使われました。弥生時代には、神仏の器として漆器が使われるなど、歴史的にも我が国を代表する独自の伝統文化として知られ、漆工芸の技と歴史は変わることのない価値を伝え続けています。伝統技術を土台に、独自の技法を加え、素晴らしい作



品を発表し続けている折笠さんに、漆工の技と、長い歴史と伝統の継承について伺いました。

父に師事、高校卒業後サラリーマンから漆芸家へ

兆春さんは1940（昭和15）年2月14日、蒔絵師の父・折笠光民さん（英二さん）の四男として生まれました。自宅は会津若松市の神明通り、まさに街の真ん中。

兄の急逝で
サラリーマンから漆芸の道へ

兆春さんの兄弟は自分も入れて男6人。「6人いても、蒔絵や漆に興味のある兄弟、興味のない兄弟がいるから、面白いですね」

幼い頃は、家業である漆芸の道へ進むことは考えておらず、高校を卒業したら就職しようと考えていました。ところが、就職試験を受けようと中学の先生に相談すると、先生から、「家を継がなければならぬのだから、就職はダメだ」といわれました。

「父は私に継がせたいと思っており、もしかしたら先生は父の話を聞いていたのかもしれない」と振り返る。

進学を決意し、会津工業高校の漆工（しつこう）科（現在は建築インテリア科）に進学し、漆を学びました。高校で漆工芸に取り組みうちに、次第に「この仕事は自分に合ってるなあ」と実感し始めたそうです。「ちようど、高校で漆を覚えてくれた先生は、父の友達だったんです。そんな関係もあっ

て、先生が熱心に教えてくださるし、私自身も、『ああ、この道かなあ』と思うようになっていました」。卒業後9年間、父の工房を手伝いました。

その後、縁あって、会津出身の奥さんと結婚します。結婚して、「漆芸だけで妻子を養うのは難しい」と、郡山市の老舗デパートに就職しました。このときは、「漆工芸の道には入らない」と思っていたそうです。

デパートでは、呉服販売、外商企画など、いろいろな職場を経験しました。かなり忙しく、朝出勤して、帰宅するのは夜中の12時1時。それでも、120年の歴史を誇るデパートでの仕事はやりがいがあり、充実した毎日でした。

ところが兆春さんに大きな転機が訪れます。就職して5年目を迎えたころ、家業を継ぐと思われていたお兄さんが急逝してしまつたのです。そこで急ぎよ、兆春さんが継ぐことになりました。

しかし、ちようどその頃、銀行や大手の企業などから、兆春さんに引き抜きの話が出ていました。奥さんは「漆工芸では食べていけ

ない。銀行からは支店長の話もあるのだから、そちらにしてほしい」と、会津でも有名な漆業の社長が訪ねてきて、「自宅や作業場を準備するから、会津に戻らないか」と熱心に誘ってくれました。

兆春さんはとても悩みました。「でも私はやはり漆芸の仕事も素晴らしいと思いました。それで郡山で頑張ろうと決め、そうしたお誘いは丁寧に辞退しました。」

工房に入ることを反対する奥さんにはこういつて口説いたそうです。

「これ以上の苦労はさせないから。今以上に経済的にも安心できる生活をさせてあげるから。」

それから50年。郡山市の自宅内にある折笠うるし工房で制作を続け、多数の賞を受賞しました。

これまでです



と、「夫唱婦随」で作品の展示や販売をサポートし続けている奥さんは、当時のことを振り返り、こう笑います。

「さあ、この人が言ってくれたことは、実際にはどうだったと思いますか？」

折笠さんが見つめ合う奥さんの優しい笑顔が、漆芸の道を夫唱婦随で歩んできた充実した日々を物語ります。

日展や日本新工芸展
各賞に入選し高い評価

初めて日展に入選したのは昭和56年、第13回日展。作品「陽炎（ようえん）」は、銀座の菓子店がお買い上げになりました。その後、昭和62年から平成22年の第42回展まで連続入選を果たしています。このほかに、河北工芸展に22回招待出品し、同展の顧問として活躍。また日本新工芸展にも31回入賞し、審査員も務めました。

郡山市文化団体連絡協議会の文化栄誉賞（平成12年）、郡山市社会教育功労賞（平成16年）、郡山市文化功労賞（平成24年）、郡山市文化団体連絡協議会創立60周年記念特別功労賞（平成26年）、福島県文化スポーツ知事感謝状（平成27年）、郡山市特別表彰（平成28年）、福島県文化功労賞（平成29年）を受賞。

優れた技とともに、地域文化芸術活動の発展への貢献が高く評価されました。

優れた伝統の漆芸の技法

これまでの表彰は、「兆春塗」という独自の技法が高く評価された結果です。

「兆春」とは、折笠さんの雅号ですが、この「兆春塗」が誕生したのははきつかけがあります。

あるとき、漆芸に詳しい人から、「折笠さんの作品は、会津塗りですか？それとも会津塗りでないのですか？」と聞かれることがありました。そのとき兆春さんは

「私の作品は会津塗りでありません。私だけの独特の塗りです」と答えました。するとその人は「それならば、『兆春塗』としたらどうですか？」と言ってくれました。それ以降、作品は「兆春塗」と呼ばれるようになりました。

乾漆（かんしつ）技法と
『兆春塗』の特徴

「兆春塗」は、乾漆技法で制作された漆工品です。乾漆技法は、奈良の興福寺にある国宝で重要文化財

でもある「阿修羅像（あしゅらぞう）」が有名です。

技法は、まず、事前にデザイン画を描いたり、発泡スチロールで形を作ったりして、実際の大きさに、形に手を加えたりしたあと、粘土で形を作ります。その上に麻布を一枚貼りつけて乾かし、また一枚作業を15回〜20回ほど繰り返します。

乾ききつたら粘土を壊し、漆下地を5、6回重ね、さらに漆をか15回から30回塗り重ねた後に、研ぎ出し、磨き上げをします。これらの工程の間に、金粉や卵の殻、青貝、プラチナなどを漆の表面に貼ったり、置いたりし、またさらに漆を重ね塗りして研ぎ出し、磨き上げる、という工程が入ることも。

一つの作品が完成するまでには、最低でも1年から3年、長いものではもっとかかります。特に展覽



会に出品する予定の作品は、形が決まるまでに半年位かかるのが通常。

「デザインの部分に非常に時間がかかります。デザインは、自分のオリジナルのもので他人の真似ができませんから。自分独特で、

しかも創作性の高いものを作らないといけないわけです。ここに手間も時間もかけていきますが、このデザインの部分が一番楽しく、やりがいがあります。その後の工程に入れば、どんどん進んでいきます」と、兆春さんは微笑みながら話してくれました。

もう一つ繊細な作業が、研ぎ出しと、磨き上げ。独特の柔らかな光沢を出す最後の仕上げの作業で、最低でも2ヶ月ぐらいの時間をかけます。



この作業は、重ね塗りしたものを磨きながら削っていく工程。漆が塗り上がった状態で、表面を耐水ペーパーや、朴(ほお)の木の炭「朴炭」、椿の木の炭「椿炭」「消炭」などで、丁寧に研ぎ出していきます。そのうちに中の色が出てきます。研ぎ出すうちに金箔が表に出てきて、金や赤のマーブル模様、自然が描き出す美しい墨流し模様や、まだらの流し絵模様が鮮やかに描き出されてきます。「一つ一つの工程を手作業で、色や感触を確かめながら進めていきます。最近は大産生産するために、機械で仕上げたものが出回っていますが、そのような製品ではこうした艶(つや)は出てきませんし、使っているうちに艶が消えてしまうものもあります。ですが、私の作品は、使っているうちにどんどん艶が出てくるのが特徴です。」

生きている漆製品

漆製品は、温度や乾燥に弱い、繊細さがあります。電子レンジや食洗機など、温度が上がる家電製

品などで使うことはできません。また、直射日光を避けて保管し、丁寧に扱う必要があります。その理由は、漆製品は生きているからです。

中には、日本よりも乾燥した地域で、湿度が15%ぐらいの国や地域にお土産として持って行った場合、割れてしまう漆工芸品があります。「兆春塗」は、乾燥した地域に持って行っても割れることがないそうです。外国に持って行っても、割れたり、曲がったりということがありません。

「割れてしまうものは、生地に漆を下塗りして、上塗りして、たいてい1回、もしくは数回で塗りを終えた品です。私の場合は15回から30回と、何度も漆を重ね塗りしています。このために割れることがありません。」

「幾重にも丁寧に工程を踏んでおり、そのために堅牢で鮮やかという、美と実を兼ね備えたオンリーワンの品になっているのです。」

かつて、華道展があったとき、「兆春塗」の作品を花器として使ったことがあったそうです。来場者の皆さんに鑑賞してもらった

水を入れて花を生け、スポットライトが当たる場所に1週間展示しましたが、花器には変化もなく、全く問題はなかったそうです。

「極端な高温や直射日光を避けていただければ、あとは大丈夫。ほとんど日常使いをしてください」とアドバイスしているそうです。漆製品は「高額なので、特別の時にだけ使おう」という人が多いのですが、兆春さんや奥さんは相談を受けると、「どんどん使ってください。手入れも、湿ったふきんで拭くぐらいで大丈夫」と説明しています。ほとんどの人が驚き、そして喜んでくれるそうです。

自ら学び、失敗を繰り返して習得していくのが本場の技

伝統的な会津塗りの技法を発展させて作り上げた「兆春塗」。伝統を踏まえて、さらに新しいものへと発展させた兆春さんの努力は一朝一夕ではありません。

「漆工は非常に歴史が古いものです。こうした歴史のある技法は、見たり聞いたりするだけでなく、自分で実際にやってみて、何度も



何度も失敗しながら、少しずつ成功していくんですね。私は今でも失敗の連続ですけどね。完璧なもの、なかなかできないですね。芸術は、『その作者が亡くなる寸前に完成したものが完璧なものだ』といわれますが、日々挑戦し、工夫しながら取り組んでいくものなのでしょう。それは、人格の完成と同じですね。もちろん、技法は

他の人にも教えます。でもなかなかこういう事は、教わってわかるものではないんです。実際に自分でやってみて、どうしないとダメだ、ああしないとダメだと、体験しながら、自分の腕を磨いていくしかないんですね。」

失敗しながら、挑戦しながら、個性豊かな作品を作り上げていくこと。そして楽しみながら、飽き

ないで根気強く造ることが重要と語る兆春さん。

「順序として、まず経験してみ、経験を積んで体験することです。体験と言うのは、体で覚えていくと言う事なんです。その後には修行の道に入ること、修めていくということ。それには失敗の繰り返しが必要なんです。その目標とする、高い目標などはもう掲げることができません。目の前にあることを一つ一つやっていくことですね。そして、評価というものは他人がするものです。『失敗は逆境に克つ』と言われますけれど、逆境に負けてはいけません。継続は力なりといいますが、継続していかないとダメです。実際のにはどの工程も辛いことではありますけれど。」

様々な体験を経て、この道に生きる哲学を話してくれました。

漆が大事にされてきた理由

漆の文化が日本の伝統や技術や文化になってきた理由を伺いました。

重要な後継者育成

今、漆工芸の世界では、他の芸術の分野同様に、後継者の育成が課題になっているそうです。

「後継者の育成が非常に重要です。この世界を将来につないでいくには、それしかありません。しかし独立していくために技を習得するまでの間は修行の時期。この間は、生活費としての自己資金が必要な場合や、別の仕事も並行してやりな

がら、あきらめずに技能を身につける根気も必要です。」
「なんとか、後継者の育成を進めていきたい。漆芸品は、日本の伝統工芸として、海外でも関心があるということ、海外で販売しようという話があります。嬉しい事です。」

すし、日本の誇りとなるような作品をどんどん海外に送り出していきたい。」
人を通して政治家や俳優、外国大使館、陶芸家等に献上や献上、郡山市の美術館や文化センター、公民館などに作品を寄贈してきた

兆春さん。美しく高級感あふれる「兆春塗」を、これからもますます、様々な場所や機会に目にする事ができることでしょう。

2018年の抱負

最後に2018年の抱負を伺いました。

「今年は未完成のものを完成させたいと思っています。実は、50代、60代の頃は、漆の仏像、阿修羅像のような作品を作りたいと思っていました。ところが今はちよつとだめかもしれないね、歳でやはり制作には相応の体力が要りますから。大きい目標よりも、今、半端な様態の仕事を一つつ完成させていくということが大事。その基本を大事に、今年もまずまず頑張りますよ。引き続き、後世に残る新しい作品に挑戦したいと思っています。」
謙虚な言葉で今年の目標を語っていただきました。

（折笠兆春（光助）さん）
プロフィール

1940（昭和15）年

福島県会津若松市生まれ

1958（昭和33）年

会津工業高校漆工科卒業

父・光氏に師事、現在に至る。

日展会友（震災により退会）

河北工芸展顧問

福島県総合美術展運営委員・招待・審査員

福島県美術家連盟副会長・評議員

福島県南美術家連盟会長

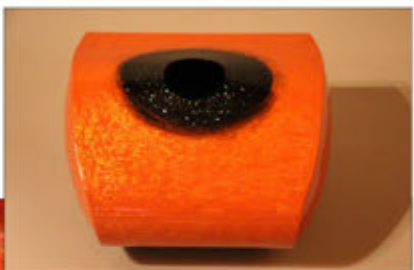
福島県南工芸美術会会長

○日展1981（昭和56）年以降、25回入選

作品「陽炎」「暁」「黄雲」「星の砂」「ひとひらの詩」「ころも豊かに」「天空燦々」「永遠の空」など多数

○河北工芸展1992（平成4）年以降、22回招待出品

○日本新工芸展1980（昭和55年）以降、31回入選



折笠うるし工房の美しい作品



採用と教育研究所

企業、自治体等の採用と教育を手がける。福島県を中心に、いい会社を目的に「仁財育成」のサポーターとして定評がある。笑いが溢れた楽しく役立つ講演は経営者から学生まで幅広く人気で全国を駆け回る。

YELL 16号 発行 / 採用と教育研究所
代表 半田真仁

〒960-8055福島県福島市野田町6-7-8 B103
TEL 024-529-5153 FAX 024-529-5794
E-mail: info@saiyoutokyouiku.com

